〈研究室紀要〉第28号　東京大学大学院教育学研究科　教育学研究室　2002年6月

《書評》

高吉嬉『〈在朝日本人二世〉のアイデンティティ形成——旗田巍と朝鮮・日本——』

櫻井　歓

本書『〈在朝日本人二世〉のアイデンティティ形成——旗田巍と朝鮮・日本——』(桐書房、2001年)は、著者・高吉嬉(コウキルヒ)氏の博士学位請求論文「旗田巍における〈植民意識克服〉と〈アイデンティティ統合〉——植民地朝鮮と戦後日本を生きた一知識人の思想形成の研究——」(2000年9月、東京大学に提出。2001年3月、博士(教育学)の学位を授与される。)に基づいて刊行された。

1.〈境界人〉という視座

本書で論じられる旗田巍(はただたかし)(1908-1994)は、戦後日本の朝鮮史研究の開拓者として活躍した〈在朝日本人二世〉の歴史学者である。彼は、植民地朝鮮に生まれ、中学校卒業までの時期を朝鮮で育ち、熊本の第五高等学校を経て東京帝国大学文学部東洋史学科を卒業、東洋史学の世界で活動した。その後、南満州鉄道株式会社(満鉄)調査部北支経済調査所調査員などを勤め中国で活動、戦後に帰国してからは東京都立大学人文学部教授などを勤め、朝鮮史研究会の設立に尽力するなど朝鮮史研究に生涯を捧げることとなった。

本書の新鮮さは、著者が旗田の生涯と業績を丹念に読み解きながら、旗田を日本と朝鮮との狭間を生きた〈境界人〉として描き出す点にある。また本書が、従来旗田に関する先行研究が皆無に近い状況であったなかで、比較的地味なこの一歴史家に焦点を当て、初めて本格的な学術的検討を加えた研究である点も特筆すべきである。だが、そもそも〈境界人〉とはいかなる存在か。著者は、J.クリステヴァらの議論を参照しながら〈境界人〉について述べている。つまり、「あらゆる「境界」に引き裂かれ、逆にその「境界」から人間的な活力と洞察を描き出し、周囲の人たちの生を高揚させることになった彼らの存在は、近代の国民や国家というカテゴリーを相対化する視点を提示してくれる」(19頁)というのだ。日本の植民地支配は、さまざまな境遇の「故郷喪失者」・「異郷者」ともいうべき人々を生み出した。そこに約70万人の在日朝鮮人の人々が含まれるのはもとよりだが、他方でやはり約70万人の在朝日本人が存在したことには一般に比較的関心が向けられていない。双方とも、そこには各々の境遇に応じた多様な人生があったはずである。本書では、〈在朝日本人二世〉である旗田が日本と朝鮮との間で揺れ動き、内面的葛藤を抱えつつ朝鮮史研究を切り拓いてゆく過程が丹念に辿られている。そこには、植民地支配をめぐる従来の言説が支配／被支配の二分法的思考に囚われ、支配する側と支配される側の双方を一枚岩的で均質なカテゴリーとして捉え、その多様な経験や日本と朝鮮の狭間を生きる〈境界人〉の内面的葛藤をなおざりにしてきたことに対する著者の鋭い批判意識がある(22-23頁)。

しかし、旗田を〈境界人〉として描き出す著者のパトスは、そこにのみ帰せられる訳ではないようだ。本書に垣間見られる著者の思いはまた、〈境界人〉として生きることと自らの留学体験とを重ね合わせているようである。1991年より10年間にわたる日本留学生活のなかで、歴史認識をめぐる「日韓関係論」をテーマに研究を続けてきた著者は、「序論」のなかで留学生活を回顧して述べている。「自分の中に内面化された日本や日本人に対するイメージと、実際に触れた日本や日本人とのズレに対する戸惑い。」そして、著者の考えを大きく変えるきっかけを与えた〈在日〉の存在(24頁)。

> 約十年間、こうした問題と格闘してきた私は、いつの間にか、韓国人にとっても異質な存在になりつつあった。越境する現代において、留学生も〈境界人〉の一人であることに気づかされたのである。その宙吊りの状態をどう受けとめるか、安住の場を持たない不安が大きくなり、韓国に早く帰るべきだという焦りが襲ってくる。しかし、一度「亡命」的存在となった人間

は、その精神的「亡命」状態を生き続けるしかないのかも知れない。(25頁)

安住の場を持たない精神的「亡命」状態。本書の底流には、〈在朝日本人二世〉として〈境界人〉の生を生きた旗田に対する、やはり〈境界人〉として留学生活を続けてきた著者の共感が存在するように思われる。一人の歴史家に寄り添って地道に書き上げられた本書の成立の背景には、旗田と著者の〈境界人〉としての出会いがあったと言うべきである。

2.〈清算すべき勘定書〉

本書の特徴の一つとして、全編を貫くキーワードである〈清算すべき勘定書〉(account to settle)という言葉が挙げられる。だが、その説明の前に、著者の戦略をもう少し明らかにしておこう。

本書の考察は、「序論」で立てられる二つの課題意識に導かれて進められる。

それは第一に、「植民地支配責任」の自覚の問題に関するものである。旗田は〈植民者の子〉として朝鮮に生を享けた。人が、いつどこに、いかなる境遇のもとに生まれるか、仮にそのこと自体は偶然の結果として責任を問われないとしても、その生をいかに生きたかは当人に責任を問われうる事柄である。旗田は、近代日本人のアジア観の形成とその植民地支配と切り離せない関係にあった東洋史学の世界に身を置き、戦時中は満鉄調査部に入り中国で活動した。少なくとも彼の人生の前半は、日本の植民地支配と切り離して考えることはできない。著者は次のように問う。「旗田が過去の自分とどう向き合っていこうとしたのか、そこに「罪」や「責任」の自覚があったのか、……自らが自覚した「罪」や「責任」をどのように清算していこうとしたのか。」(12-13頁)

第二の課題意識は、これまでに触れてきた〈境界人〉への注目に関わるものである。たとえ〈植民者の子〉であっても、幼少期から中学校卒業までの少年期を朝鮮で過ごした旗田にとって、朝鮮は生の原点であった。この生い立ちは、後年の旗田に、故郷に対する郷愁と〈植民者の子〉としての後ろめたさというアンビヴァレンツを生じさせ、彼はせめぎ合う二つの思いの間で内面的葛藤を抱え込む。支配／被支配といった二分法的思考によっては、こうした葛藤は捨象されてしまう。それをいかに超えるか。著者は述べている。

旗田を全体的に捉えるためには、旗田の〈生〉が歴史に規定されたかたちで、日本と朝鮮の間に引き裂かれ、その狭間で〈境界人〉として生きざるを得なかった側面を見ていく必要がある。それによって、支配・被支配、抑圧・被抑圧、差別・被差別といったこれまでの二分法的思考を相対化することが期待される。(18-19頁)

その視野は支配／被支配の二分法に限られない。著者はまた、文化／自然、男性／女性、西洋／東洋、日本／アジアなど、多層的な二項対立図式の強制を解体してゆく大きな課題に連なるものとして捉えるのである。

以上のような課題意識に導かれる本書では、ライフコース、ライフヒストリー、サイコヒストリーなどの研究にみる個人史と歴史を結ぶ手法にヒントを得て、近現代における日朝(日韓)関係史と旗田巍を結びつける方法が採用される。本書での考察は時系列に沿った形で進められるが、その際旗田の経歴(life history)が次の四つの時期に区分されている。すなわち、第一段階:原体験と前思想形成の時期(1908-48年)、第二段階:戦前の朝鮮史研究批判の時期(1948-65年)、第三段階:日本人の朝鮮観批判の時期(1965-72年)、第四段階:〈在朝日本人二世〉としての葛藤の時期(1972-94年)というものである(34-35頁)。本論部分の四つの章は、この時期区分に対応している。

なお、本書の「序論」は、個人史と歴史を結ぶ手法によって、日朝(日韓)関係史にアプローチする際に考慮すべき諸問題や先行研究を幅広く概観しており、この領域へのよき見取り図を与えて読者を導いてくれるものである。

さて、以上のような戦略をとる本書で旗田の生涯を読み解いていく際のキーワードが〈清算すべき勘定書〉である。この言葉は、人生の早い時期に形成され、生涯つきまとい、いずれ何らかの仕方で解決されねばならない葛藤を意味する。そもそもはE.H.エリクソンにより使用されたこの言葉は、自伝でしばしば〈呪い〉(curse)として言及されるものである。例えば、エリクソンが分析したM.ルターにとっての〈呪い〉とは、父や教師たち、あるいはローマ教会やその教義に由来する父性の残酷さであった。栗原彬によれば、「創造的変革者、イデオロギー改革者の行為の基底には青年期後期までに形成される〈清算すべき勘定書〉がある」という[1)]。本書では、この〈清算すべき勘定書〉という言葉が、旗田の生涯を一貫したストー

リーとして解釈するうえで大きな効果をもたらしている。だが、本書を読むうえで誤解されてはならないのは、本書はエリクソンが『青年ルター』や『ガンジーの真理』で行ってみせたサイコヒストリーの手法を、旗田の分析に適用したという性格の研究ではないという点である。著者はむしろ、〈清算すべき勘定書〉という言葉をエリクソンから借り受け、この言葉を旗田の生涯を読み解く鍵(キー)として自在に用いながら、著者独自の分析を展開してゆくのである。では、そこで読み解かれた旗田の生涯とはいかなるものであったのだろうか。そのことを次に見ていくことにしよう。

3.〈植民者の子〉

旗田は、医師として岡山県から朝鮮に移住してきた父をもつ〈在朝日本人二世〉として1908年、朝鮮の馬山の地に生まれた。著者は、在朝日本人社会に関する研究も参照しつつ、旗田が当時の在朝日本人社会のなかでも比較的にエリート家庭で生まれ育ったこと、彼が〈植民者の子〉として暮らしている傍らには植民地支配下で苦しむ朝鮮人がいたことなどを明らかにしている。そして、幼少年時代を馬山で生活した旗田には、「美しく楽しい故郷」と「暗くて貧しい朝鮮人」という相剋する二つのイメージが形成されたものと分析している。幼少期の旗田の検討については、研究のために使用された史料上の制約のためか、幼少期の旗田が抱いたイメージを後年の回想に基づいて再構成した部分が見られ(57頁、注8)、方法論上やや不満足な点が残るのは確かである。だが、先行研究が皆無に等しい旗田の生い育ちを丹念に描き出そうとする著者の意欲に感服される。旗田にとって朝鮮は、まず生まれ故郷、すなわち生の原点であったのだ。

旗田は、釜山で中学校を卒業した後、熊本の五高と東京帝大で青春時代を過ごし、その間に社会主義思想と朝鮮史研究に出会うこととなった。特に、東大の東洋史学科で、恩師となる池内宏に歴史研究の方法を学び、朝鮮史の分野で卒業論文を書いたことは、その後の旗田の生涯を大きく方向づけていったようである。朝鮮は彼にとって、生まれ育った故郷であるとともに、自らの研究対象ともなるのである。しかし、このことは同時に、日本の植民地支配や大陸侵略を学問的言説によってイデオロギー面で支持した東洋史学の世界に足を踏み入れることをも意味していた。その辺りの事情は、著者が旗田の足跡を辿ることと併せて、東洋史学(東洋学)の開拓者であった白鳥庫吉と近代日本の拓殖事業の創始者といわれる後藤新平との結び付きなど、当時の学問状況にも目を配ることによって明らかにしている。大学卒業後の旗田は、「満蒙文化研究事業」などに従事して研究を続けることとなる。さらに旗田は、1940年には満鉄調査部の調査員となり、中国へ渡って「華北農村慣行調査」に従事、44年からは北支開発会社調査局で労働力給源の調査に従事、日本の敗戦後も1948年の引き揚げまで中国で生活を続けることとなった。

以上、旗田の出生から戦後に中国より引き揚げてくるまで、概ね彼の人生の前半にあたる40年間を検討したのが第1章である。この時期は、旗田にとって〈清算すべき勘定書〉が作られた時期として分析される。それは、旗田が〈植民者の子〉として朝鮮に生まれたという、当人には逃れようのない出自に由来する面をもつ一方で、青年期以降、東洋史学の世界に身を置き、1940年代には中国に渡り満鉄調査部などで活動したという、自ら歩んだ人生行程による側面をもっている。この〈勘定書〉を旗田がどのように受け止め、それに応えてゆくのか。著者の考察は、戦後日本での旗田の活動へと向けられる。

4.朝鮮史研究の道

敗戦、そして中国からの引き揚げによって、旗田は、生の原点である生まれ故郷の朝鮮から切り離され、日本で生活する身となった。故郷を喪失した〈境界人〉としての生を本格的に歩み出したといえるだろう。そして、その後の旗田は、戦後日本の朝鮮史研究の開拓者として活躍してゆくこととなる。概ね旗田の後半生にあたるこの時期を、朝鮮あるいは朝鮮史研究への関わり方の変化にしたがい三つの時期に区分して検討したのが、第2章以降の各章である。

旗田は1950年に東京都立大学教授に就任し、翌年には彼の執筆による『朝鮮史』が岩波書店より刊行される。さらに、旗田の尽力により1959年には朝鮮史研究会が設立された。こうして旗田は、朝鮮史研究の道を歩んでいくのである。

『朝鮮史』は、ちょうど朝鮮戦争の最中に刊行された。同書の「序」での旗田の言葉は、当時、多くの読

者に衝撃と感銘を与え、大きな反響を呼んだという。すなわち旗田は、戦前の朝鮮史研究を「人間のない歴史学」と批判するとともに、次のように述べている。「何よりも朝鮮の人間が歩んできた朝鮮人の歴史を研究せねばならない。いま苦難の鉄火に巻き込まれている朝鮮人の苦悩を自己の苦悩とすることが、朝鮮史研究の起点であると思う。」[2]著者もこの『朝鮮史』に「日本と朝鮮の間で揺れ動く旗田の姿」を垣間見ているように(128頁)、朝鮮人の苦悩に共感しようとする旗田の姿勢の背後には、〈境界人〉として生きる旗田自身の生が重ねられているように思われる。

だが、旺盛な社会的発言を展開するというよりは、むしろ研究志向が強く学究肌であったと見受けられる旗田の場合、朝鮮人の苦悩と、日本人の朝鮮観の歪みとをよりアクチュアルなものとして実感するようになるのは、概ね1960年代前半に経験した二つの社会運動を通じてであったようだ。それは、「李少年助命運動」(1960-62)と日韓会談反対運動(1961-65)とであり、これらは、その後の旗田の活動への大きな転機となるものであった。第2章では、この二つの運動の時期までを論じている。このうち、前者「李少年助命運動」に関する記述は、本書のなかで著者の筆致が最も生彩を放ち、読者を引き込んでいく部分である。評者にはそう思われてならない。また、この部分は、本書中の他のどの項目よりも多くの紙幅を割いている点でも注目される。著者は、旗田と李珍宇少年との出会い、そして助命運動の展開を丹念に描き出している。李珍宇は、「小松川事件」——1958年に東京で起きた女子高生殺害事件ならびに「賄婦殺し」事件——の被告として1962年に死刑にされた在日二世である[3]。

本書では、李の生い育ち——貧しい家庭環境や就職差別——、朝鮮人への偏見に満ちた事件後のマスコミ報道とその時代的背景、上告直前の李と旗田との劇的な出会い、助命運動の広がり、運動内部での政治的・宗教的立場をめぐる相剋、運動が国際的な民族問題に発展しかねない情勢、虚しくも死刑の断行に終わる結末、そして助命運動とは微妙にすれ違っていた李自身の実存の問題——、これらのことが鮮やかに描かれている。この助命運動を論じた部分は、一人の在日少年をめぐる一連の出来事のなかに、民族、政治、宗教、そして実存、といった諸問題が複雑に絡み合う様相を垣間見せてくれるものであり、本書の圧巻というべき部分であると思われる。旗田は、李との予期せぬ出会いを通じて、図らずも助命運動の先頭に立つこととなった。そして、朝鮮あるいは朝鮮人に対する日本人の偏見を肌身で体験するに至ったのである。

旗田にとって、「李少年助命運動」と引き続く日韓会談反対運動との二つの運動を通じて、直接的・間接的に朝鮮人の人々と出会い、その苦悩を肌身に感じることとなった経験は、自らの〈清算すべき勘定書〉を自覚するうえで大きな意味を持ったようである。

1960年代半ばまでに経験した二つの運動を経て、旗田の研究テーマは「日本人の朝鮮観批判」へと移行する。第3章では、それ以降の時期について論じられる。〈清算すべき勘定書〉の支払いを、旗田はまず朝鮮史研究者としての自らの専門分野で引き受けていく。それは、まさに自らが活動してきた東洋史学の世界での朝鮮観を批判的に析出することであり、また一方では主体的朝鮮史を描き出そうとする努力であった。併せて旗田は、朝鮮史教育の改善のためにも奮闘する。

ところで、こうした旗田の努力と同じ時期、独自な世界史論により知られる上原専祿は、明治中期以降に西洋、日本、東洋という三元論的な問題意識が現れてきたことを次のように指摘していた。すなわち、「まず西洋が日本と対立している先進国として自覚される。日本がその西洋の先進国の一つに追いついて行く過程で、今度は東洋にたいして西洋的なものを押しつけていく。その場所は東洋なんだ。」[4]上原の世界史論には、歴史学の領域区分ともなったこの三分法への批判意識が存在したことは言うまでもない。日本人の朝鮮観を批判してその是正を目指す旗田の努力は、上原の指摘した日本人の東洋観の問題性を克服するための具体的な取り組みの一つであったとみることもできるだろう。

5.アイデンティティと〈境界人〉

1970年代に入り旗田は、南北分断の状況が続くなか、北朝鮮と韓国の双方を訪問する機会を得る。自らにとっての生の原点を訪ねるこの経験は、彼に再び大きな転機をもたらすこととなった。これ以降、旗田の晩年へかけての時期を扱ったのが第4章である。

南北訪問を通じて旗田は、その発展ぶりを目の当

たりにし、そこに生きる人々と出会う。これを契機として彼は、自らの朝鮮体験を語り始め、生い立ちに深く根差した「暗くて貧しい朝鮮人」というイメージを自己批判し、植民意識の克服に取り組んでいく。しかし、それとは裏腹に、日本と朝鮮との狭間を生きる〈境界人〉である旗田にとって、〈在朝日本人二世〉という自らのアイデンティティ問題は、容易に決着のつくものではなかった。著者によれば、旗田にとって朝鮮とは自己の一部であった。批判されるべき植民地支配と、その一方で抑え難く込み上げてくる故郷への思い……。朝鮮に対する後ろめたさと郷愁とのアンビヴァレンツを抱えながら生きた旗田は、日本と朝鮮との間で引き裂かれたアイデンティティの統合の鍵を「日朝友好」に求める。しかし、その大きな課題の実現はままならぬままに、旗田は他界してしまう。

第4章の末尾で、著者は旗田のアイデンティティ統合の問題を次の図式によりまとめている。すなわち、「日本人の朝鮮観の改善＝旗田の〈清算すべき勘定書〉の支払い＝日朝友好の達成＝旗田のアイデンティティの統合」。しかし、旗田の努力にも拘わらず、「日本人の朝鮮観の改善の不十分さ＝〈清算すべき勘定書〉の未払い＝日朝友好の未達成＝旗田のアイデンティティの不統合」という図式が残されてしまったという(294頁)。さらに〈結論〉では、上の図式のようなアイデンティティ統合を目指した旗田は、反省すべき「日本人」として自らを帰属させることとなり、〈境界上の知識人〉あるいは〈亡命知識人〉としての積極的な意味を提示できなかったことが指摘される(305-306頁)。そして、二分法的思考の問題性の自覚に立った今後の日韓交流の課題について考察される。

本書が見せてくれる旗田解釈は、狭間を生きる〈境界人〉にとってのアイデンティティ統合の困難さを感じさせるものである。しかしその反面で、第4章の末尾から〈結論〉に至る図式的解釈が、〈境界人〉としての旗田の生を過度に単純化してはいないか、という疑問も否めない。著者が、批判すべき二分法的思考の枠組みに自らの旗田解釈を押し込めてしまっているのではないか、と思われる点が、読後に若干心残りである。

しかし、本書が旗田巍という一知識人を〈境界人〉として描き出したことの意味は大きい。そこには、容易に統合などされ得ないアイデンティティの問題、そしてむしろ拠り所のないことを積極的に引き受けつつ生きる精神的ディアスポラともいうべき生の問題が含まれている。それはまた、アイデンティティ統合という図式には収まらない人間形成の問題でもある。

註

1） 栗原彬『歴史とアイデンティティ――近代日本の心理＝歴史研究』(新曜社、1982年)、20頁。なお、次の文献も参照。E.H.Erikson, *Insight and Responsibility : Lectures on the Ethical Implications of Psychoanalytic Insight* , New York : Norton , 1964 , p.202.

2） 旗田巍『朝鮮史』(岩波書店、1951年)、5頁。

3） 「小松川事件」に関しては、李の冤罪説も主張されるなど、その真相は未だ闇の中であるとされる。なお著者は、この事件とその後の助命運動に関して、既に次の論文で考察している。高吉嬉「「小松川事件」と「在日」少年――1960年前後の在日朝鮮人へのまなざし――」、東京大学大学院教育学研究科教育学研究室『研究室紀要』第24号(1998年)、21-31頁。

4） 上原専祿「現代における「東洋」と「西洋」」、〈上原専祿著作集25〉『世界史認識の新課題』(評論社、1987年)、528頁。